

ナホトカ市概要



ナホトカ湾

2021年9月
在ウラジオストク日本国総領事館

目次

1	位置	2
2	沿革	2
3	気候	2
4	人口・住民	2
5	外交団	2
6	行政・議会	3
7	経済・産業	3
8	治安	4
9	日本との関係	5

ナホトカ市概要

1 位置

(1) ナホトカ市は、ロシア連邦沿海地方の南部に位置し、極東最大の港をもつナホトカ湾に面し、沿海地方で第2の重要都市である。

(2) 東京からの直線距離は約1,000km、函館とは約420km、ウラジオストクからは180kmである。

2 沿革

(1) ナホトカ市が所在する沿海地方の領域には、古くからツングース系民族が居住しており、渤海(698～926年)、金(女真族、1115～1234年)等の国家が興亡を繰り返した。また、中世から近世にかけては元、明、清国等の勢力が及んだ時期もあった。

(2) 1850年代前半、東シベリア総督ムラヴィヨフ・アムールスキの支援を受けたロシア海軍士官ネヴェリスコイが極東地域を探検し、アムール川流域に砦を建設するなど、ロシアの極東進出の足がかりを築いた。その後、ロシアは1858年のアイグン条約締結によりアムール川左岸とその航行権を、また、1860年の露清間の北京条約によりウスリー川東岸を獲得し、これにより現在の沿海地方はロシア領となった。

(3) 1859年、ロシア艦「アメリカ」号が沿海地方の海岸で天然の良港を発見し、この湾を「ナホトカ(ロシア語で「掘り出し物」の意)」と名付けた。ナホトカ湾沿岸への入植は19世紀末に本格化し、1907年、同地にアメリカンカ村が建設された(1940年にナホトカ町となる)。

(4) ナホトカ町は1950年に市に昇格し、港湾都市として発展した。また、ソ連時代には、閉鎖都市となったウラジオストクに代わり、沿海地方の対外的な玄関口としての役割も果たした。シベリア抑留者の日本への帰国港になっていた。現在のナホトカ市は大規模な商業港、漁業コンビナートや石炭・石油コンテナターミナル等を有する極東の物流・漁業の中心地となっている。

3 気候

ナホトカ市は、北緯43度東経133度に位置し、札幌市とほぼ同緯度にある。冬の気候はシベリア奥地ほど厳しくはないものの、1月の平均気温は氷点下6.8度(昼)と氷点下9.2度(夜)(2021年)、雪は少なく乾いた北風が大陸から海に向かって強く吹き抜ける。モンスーン型気候であり、年間降水量は約790mmで、7月から9月に降雨が多い。8月の平均気温は22.2度(昼)と18.5度(夜)(2020年)。

4 人口・住民

2020年のナホトカ市の人口は14万5,961人。住民の大多数はロシア人である。

5 外交団

ナホトカ市には北朝鮮「総領事館」が置かれていたが、2016年にウラジオストク市へ移転された。2003年9月には、北朝鮮の羅先市と友好都市提携に関する協定に署名するなど、北朝鮮との関係は沿海地方の他都市と比べ深い。

6 行政・議会

2014 年春、地方自治体制度が改正され、市長と市行政府長による二頭体制が敷かれることとなった。同年 6 月、ナホトカ市議会は全会一致でピリペンコ市議会議長を市長に選出し、7 月にはコリャーディン前市長を初代の市行政府長に選出した。しかし、2015 年 1 月には二頭体制が停止され、また、11 月、ピリペンコ市長は辞任した。2016 年 3 月、市議会はゴレロフ市長を選出した。2018 年 4 月、ゴレロフ市長は辞職し、同年 6 月、市議会はグラトキフ市長を選出。2020 年 7 月、グラトキフ市長に代わり、マギンスキー新市長が就任した。

7 経済・産業

(1) ナホトカ市はロシア極東の交通の要所であり、ロシア全体で見ても海上交通の分野では、サンクトペテルブルク、ノヴォロシースクに次ぐ大規模港湾都市である。ナホトカの港はナホトカ港とヴォストーチヌイ港に大別され、主な取扱貨物は石炭、石油、木材、コンテナである。また、陸路では、ハルビンー牡丹江ー綏芬河ーウラジオストク港ーナホトカ港ーヴォストーチヌイ港ーアジア太平洋の各種港を結ぶ国際輸送回廊プロジェクト「プリモージェ 1」及び長春ー吉林ー琿春ーポシエツト・ザルビノを結ぶ国際輸送回路「プリモージェ 2」の建設の構想がある。「プリモージェ 1」を構成する「ウラジオストク～ナホトカ～ヴォストーチヌイ港」間道路（延長 25 km）は 2021 年中に完成する予定である。

(2) ナホトカ港は、ヴォストーチヌイ港ができるまで極東最大の港であった。2020 年のナホトカ港の貨物取扱量は 2,680 万トンである（注：数値は同港公表のもの）。ナホトカ商業港（主な取扱貨物は鉄鋼、非鉄金属）、ナホトカ海洋漁業港（水産物、木材、金属製品）等がある。

(3) ヴォストーチヌイ港は極東で最大、ロシア国内でも最大規模の石炭積出港で、2020 年の年間石炭輸出量は 2,685 万トンとなっており、輸出先は韓国が最大で全体の 32%を占め、続いて日本、台湾の順であった（注：数値は同港公表のもの）。また、2009 年には東シベリア太平洋原油パイプライン（ESPO）の終着点となるコジミノ港が加わった。同港からの 2020 年の原油輸出量は 3,395 万トンで、現在も石油タンクを増設中であり、輸出量は今後 5000 万トンまで増量する予定である。主な輸出先は中国（83%）、日本（6%）、韓国（6%）（注：数値は同港公表のもの）。なお、同港の電力供給は沿海地方南部への電力供給と同じラインで行われていたが、2015 年 1 月に統一エネルギーシステム社によって同港に直接電力を供給するための送電設備が整備された。

(4) ガスプロムはガスパイプライン「サハリン～ハバロフスク～ウラジオストク」の支線による極東のガス化を進めており、ナホトカ市及びナホトカ鉱物肥料工場がガス化エリアに含まれる。

(5) 2020 年 4 月、デンマークのコンテナ輸送大手「マースク」が、ヴォストーチヌイ港を入口とし、サンクトペテルブルグまでを 11 日間で結ぶシベリア鉄道経由のアジア発欧州行きのコンテナ輸送サービス「AE19」の毎週運行を開始した。

(6) ナホトカ市コジミノの先進発展地区 TOR「石油化学」にナホトカ鉱物肥料工場が計画中である。

(7) 2020 年 6 月ナホトカ船舶修理工場においてカニ船 8 隻の造船が開始された。今後の 5 年間にわたって投資枠制度に基づき、ナホトカ船舶修理工場で 8 隻、ヴォストーチヌイで 6 隻が造船されることになっている。

(8) 2020 年 1 月、ナホトカで沿海地方初のデイサービス施設「日中滞在の家」がオープンし

た。

(9) ZSK 社により鉄道と海上輸送の連携を目的とした陸上輸送・物流センターの建設が計画されている。完成は2023年を予定している。

(10) 2021年8月にダリキン元沿海地方知事が経営する「ナホトカ移動海洋漁業基地」傘下「漁船団公開給油基地」により年間取扱量10万トンの冷凍倉庫が建設された。(11) 日本企業との関係では、現在実施中のヴォストーチヌィ港における第3次拡張工事において、丸紅及び三井三池製作所は同港の石炭積出し用機械等の設備拡張を行い、2019年に工事が完成した。また、2015年9月の第一回東方経済フォーラムにおいて「ヴォストーチヌィ港」社と丸紅他2社が同港第三ラインの建設及び運営に関する文書に署名した。現在スンマ・グループがヴォストーチヌィ港の東隣に同様の石炭ターミナルを建設中である。なお、丸紅は、タラセンコ沿海地方知事代行(当時)が、石炭積替の際に生じる粉塵が環境に悪影響を及ぼすとの理由で、「ウラジオストク漁業港」社及びナホトカ港との間で、石炭積替量を制限する合意書に署名したと関連し、2018年5月、ナホトカ港アスタフィエフ岬における石炭積替えコンプレクス設計及び建設に関する覚書にも署名した。石炭粉塵を最小限に抑えるため、極東初の屋根付きばら積み貨物ターミナルの建設が2020年3月から行われている(丸紅により設計協力が行われた)。2020年にヴォストーチヌィ港のコンテナ荷役大手「ヴォストーチヌィ船荷役会社」(VSC)がトヨタブランドのフォークリフト4台を購入した。

また、コジミノ港において石油化学プラント建設計画があり、同計画には三井物産がロシア側とMOUを結んでいる。

8 治安

(1) 犯罪の傾向

ナホトカ市における2020年の犯罪認知件数は2,643件で、数年ぶりに増加に転じた。犯罪の特徴として、窃盗が最も多く(犯罪認知件数の約4割)、傷害事件や薬物犯罪も増加傾向にある。

(2) 安全対策上の留意事項

(ア) 統計上、当地で検挙された犯罪者の約3割は、酒に酔った状態で犯罪を起こしている。市中では酔っ払いと認められる者には安易に近づかず、夜間の外出や単独行動のほか、バーや飲み屋等の深夜帯の利用は避けるようにする。

(イ) 気をつけなければならない犯罪としては、強盗、ひったくり、恐喝、スリ、置き引き等で、夜間の一人歩きや人通りの少ない場所への等への出入りは厳に控えるべきである。

9 日本との関係

(1) 歴史

ソ連時代には、ナホトカが極東における日ソ交流の窓口としての役割を果たしていた。1961年、横浜～ナホトカ間に定期客船航路が開設され、1967年には在ナホトカ日本国総領事館が設置された。現在、旧総領事館の建物は当時の外形を残しつつも現代風に修繕され、地元の水産会社によって保存・利用されている。

ソ連邦崩壊後の1992年、ウラジオストクが外国人に再び開放されたことを受け、1993年11月に在ナホトカ日本国総領事館が閉鎖され、在ウラジオストク日本国総領事館が開館した。定期客船航路の発着港もウラジオストクとなったが、ナホトカ市には現在も貨物船が就航するとともに経済・文化等の分野で日露交流が継続している。

(2) 日本人墓地

(ア) 第二次世界大戦終結直前の8月9日に対日参戦したソ連は、8月15日の終戦後も8月下旬から9月初めまで戦闘行為を継続し、翌46年の夏頃までの間に、満州、北朝鮮、南樺太及び千島に駐留していた旧日本軍人等を、旧ソ連、モンゴルに約1,200カ所点在していた収容所に抑留し、約10年に亘り土木建築や鉄道建設、炭坑作業等の重労働を強要した。抑留中には労役、病気、寒さ等の厳しい状況の中、多くの方々が犠牲になった。生き残った日本人の多くがナホトカ港より日本へ帰還した。

(イ) ナホトカ市の日本人墓地では、2004年6月から同年9月まで4回に亘り厚生労働省による遺骨収集作業が行われ、524柱が収集された。2012年8月にナホトカ市行政府により、1972年に日本政府が建立した石碑を含む周辺一帯が日本人墓地の記念公園として整備された(同市セニャビナ通り)。

(3) 自治体交流

ナホトカ市は、舞鶴市、敦賀市、小樽市と姉妹都市関係にある。2021年は、ナホトカ市と舞鶴市及び小樽市は、それぞれ姉妹提携締結60周年及び55周年の記念年であることから、6月に写真展「海で繋がった友情」(ナホトカ市立博物館が主催)が実施された。

(4) 文化・教育

ナホトカ市民の日本への関心は高く、在ウラジオストク日本国総領事館が同市で開催する日本文化事業には毎回多くの市民が訪れる。近年の主な当館主催文化関連行事は以下のとおり。

- ・2012年2月 日本映画祭
- ・2013年2月 日本文化体験教室(浴衣の着付け及び茶道デモンストレーション等)
- ・2014年1月 日本映画祭
- ・2014年11月 日本文化デイズ(映画上映、浴衣の着付け教室及び折り紙教室、浴衣ショー)
- ・2016年2月 日本酒及び日本食文化紹介INナホトカ
- ・2017年11月 日本文化デイズ(浴衣着付、折紙体験、着物・県道デモンストレーション)
- ・2018年12月 日本産ワイン紹介講座
- ・2019年5月 石見神楽公演
- ・2019年12月 第53回日本映画祭INナホトカ

(了)